

日本語方言における鼻音化子音の考察

—史的音韻論・方言学の視点からガ行子音を対象として—

齋藤孝滋

キーワード 鼻音化子音 入り渡り鼻音 史的音韻論 方言 比較

1. はじめに

鼻音化子音 [ʰg],[ʰd] [ʰb] 等) は、15～16世紀の朝鮮資料やキリシタン資料等から、中世末期まで中央語において保たれていたことが知られ(橋本進吉1950、浜田敦1970他)、また、現在でも(高年層に限られるが)四国・紀伊半島南部・東北地方等にみられる音である(上野善道ら1980他)。鼻音化子音は、本来その要素である入り渡り鼻音 [ʰ],[ʰ] [ʰ] が、破裂音系列の濁音としての弁別の特徴であったと推定でき(早田輝男1977、柴田武1989、高山倫明1992他)、その弁別性が、日本諸方言における鼻音化子音の破裂要素 [g],[d] [b] の多様な変化、さらには他の子音(無声破裂音他)の多様な変化を引き起こす要因となったと考えられる(加藤正信1975他)。このように、鼻音化子音は、中央語音韻史・方言音韻史上、重要な役割を演じてきたと考えられるが、未だ中央語音韻史・方言音韻研究の視点から総合的に論じた論考はみられない。

2. 目的・方法

本研究は、特にガ行音を対象として、鼻音化子音自体及び関連する音の変化とそのメカニズムについて、中央語音韻史・方言音韻研究の両視点から、総合的に明らかにしようと試みるものである。具体的には、中央語音韻史において推定されているガ行音と、全国方言の様々なガ行音を、可能な限り網羅的に扱い、それら全ての共通祖形を推定し、各変種成立のメカニズムを比較方言学的に明らかにするのである。

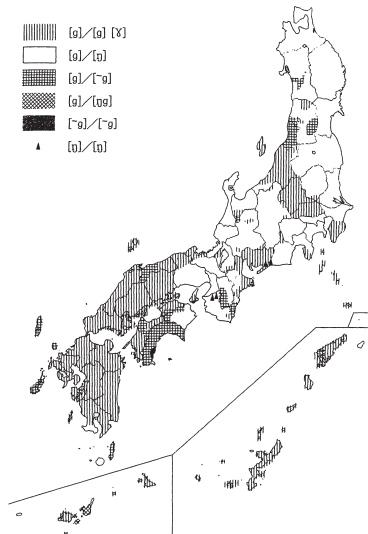
3. ガ行音の歴史—通説—

ガ行子音は、中央語の場合、一般的に上代は語頭に位置しなかったが、その後他の濁音と同様に語頭に位置するようになり、中世末期には、キリシタン資料であるロドリゲスの『日本大文典』の記述や朝鮮資料より、語頭で [g]、非語頭で [ʔg] という異音分布になっていたと推定されるのである（橋本前掲書、浜田前掲書他）。現代共通語と同様に、語頭で [g]、非語頭で [ŋ] という音価と異音分布になるのは、中世末期より後ということになる。なお、現代共通語圏では、非語頭の異音が語頭と同様の [g] に統一される傾向が進行している。

4. ガ行音の種類

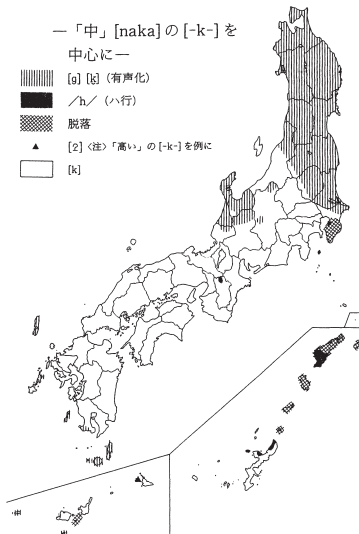
ガ行音について、全国の方言を網羅的に対象とした上野ら（1989）「10 ガ行子音（〔語頭/非語頭〕）」における異音分布の類型を、筆者の視点で、閉音節化

図1：ガ行子音（〔語頭〕／〔非語頭〕）



上野義道ら（1989）より

図2：カ行子音（〔非語頭〕）



上野義道ら（1989）より

と、さらに史的音韻論上深い関係を持つと推定されるカ行音の語中子音有声化（加藤正信1975、斎藤孝滋1992b）まで含めて、総合的に類型化すると次の①～⑬のようになる。

なお、[]/[]は「語頭の音声/非語頭の音声」を示す。また「#」は語末を示す。

㊦ [k]/[g] はカ行音の語中子音有声化が存在することを示す。音声表記は、必要に応じて筆者の方法（斎藤1992b他）に改めた。

参考として上野ら（1989）より関連地図を図1、図2として示しておく。

- ① [ʰg]/[ʰg]；[ʰgomu] ゴム…兵庫県三原郡南淡町福良本町〈淡路島〉
[ʰgarasu] ガラス、[kaʰgo] 籠…徳島県の一部・高知県香美郡美良布町・高岡郡窪川町・幡多郡大方町・中村市・土佐清水市
- ② [ʰg]/[ŋ]；[ʰgambare:] 頑張れ、[tʃaŋama] 茶釜…山形県北村山郡東根町
㊦ [k]/[g] 〈用例記載なし。但し、他の㊦ [k]/[g] と同様と推定される。〉
- ③ [g]/[ʰg]；[kaʰge] 影、[kaʰgo] 籠…高知・愛媛・香川・徳島・鳥取・奈良・和歌山・三重
- ④ [g]/[ʰg]；[kaʰge] 影、[aʰgerü] 上げる…新潟・山形・秋田の一部、福島
㊦ [k]/[g] [agerü] 開ける 県南相馬市小高区（加藤正信、斎藤孝滋ら1994）
- ⑤ [g]/[ʰg] V_{W・M}、[N] V_{N#}；[kun] 釘、[don] 道具…長崎県五島
- ⑥ [g]/[ŋg]；[kaŋgN] 鏡…沖縄県石垣島石垣・大浜・竹富島
- ⑦ [ŋ]/[ŋ]；[ŋarastu] ガラス、[ŋiri] 義理、[ŋo] 五…静岡県浜名湖西岸・北岸、愛知県豊橋市付近、[ŋakko:] 学校、[ŋoŋo] 午後…奈良県五條市・和歌山県北部の紀ノ川中・上流域的那賀郡・橋本市

- ⑧ [g]/[ŋ]；規範的な共通語パターンとされている類型。[gakko:] 学校、
[kaŋami] 鏡、…東京・千葉県北部、神奈川、長野・山梨・静岡、岐阜・
富山・石川・福井・滋賀・大阪・奈良・和歌山・徳島の広い領域等
- ⑨ [g]/[ŋ]；[gakko:] 学校、[aŋertü] 上げる、[kaŋami] 鏡、…北海道・東
⑩ [k]/[g]；[aŋertü] 開ける 北六県の広い領域
- ⑩ [g]/[ŋ]_V_{W・M}、[t]_V_{N#}、[N]_V_{N#}；[onaŋo] 女、[sut] 杉、[kan] 鍵、
[kon] 漕ぐ…鹿児島県揖宿郡穎娃町
- ⑪ [g]/[g] [y]；[kugi] 釘、[gomuvutsu] ゴム靴…群馬・埼玉・千葉県南・
愛知・新潟・香川・愛媛の広い領域・岡山・広島・山口県、鳥取・島
根〈出雲を除く〉、九州の広い領域〈薩摩半島南部を除く〉に分布が
みられる。
- ⑫ [g]/[⁰g]_V_{W・M}、[?]_V_{N#}；([ka²] (鍵=嗅ぐ) …鹿児島県薩隅地域
- ⑬ [k]/[k]；[kantu] 岩乗《丈夫》、[nikaju:] 願う《祈る》、[muki] 麦、[fuki]
釘、[kaki] 影、[piki] 鬚《毛》…沖縄県大神島

5. ガ行音の成立過程—祖形と各類型の成立過程の推定—

ガ行音の成立過程を推定するためには、①～⑬を比較し、それらの祖形を推定する必要がある。祖形は、①～⑬の成立を矛盾なく説明できるものでなければならぬが、①を祖形として設定すれば、②～⑫の成立を矛盾なく説明できる^[注1]。⑬については、その上で、さらに検討することにする。

以下に、①を祖形として設定した各パターン成立過程の推定を行う。

② [⁰g]/[ŋ] は、祖形① [⁰g]/[⁰g] における非語頭入り渡り鼻音 [⁰] による [g] への順行同化で説明できる。従って、① [⁰g]/[⁰g] > ② [⁰g]/[ŋ] の推定が成り立つ。なお、カ行音は、語中子音有声化がみられ、[k]/[g] となるが、ガ行

音が語頭では「+入り渡り鼻音、+有声性」、語中では「+鼻音性」であるため、両者が統合することはない。

③ [g]/[⁰g] は、祖形① [⁰g]/[⁰g] における語頭入り渡り鼻音 [⁰] 脱落で説明できる。従って、① [⁰g]/[⁰g] > ③ [g]/[⁰g] の推定が成り立つ。

④ [g]/[⁰g] は、ガ行音については③と同様であるが、カ行音に語中子音声有化がみられ[k]/[g]となる点で異なる。なお、ガ行音が語頭では「+有声性」、語中では「+入り渡り鼻音」であるため、両者が統合することはない。

⑤ [g]/[⁰g] V_{W・M}、[N] V_{N#}は、非語頭において、直後にV_{W・M}（広母音・半広母音）が位置する場合は、③と同様であるが、特に語末#において直後にV_N（狭母音）が位置する場合、(i) 母音V_N脱落（[⁰g] V_{N#} > [⁰g]#）+ (ii) 語末子音 [⁰g] の [⁰] による [g] への順行同化（[⁰g]# > [ŋ]#）+ (iii) 語末環境への同化による口蓋垂鼻音化（[N]#）で説明できる。従って、① [[⁰g]/[⁰g] V_{W・M}] > ③ [g]/[⁰g] V_{W・M} と① [[⁰g]/[⁰g] V_{N#}] > ⑤ [g]/[⁰g]# > [g]/[ŋ]# > [g]/[N]# の推定が成り立つ。

⑥ [g]/[ŋg] は、③ [g]/[⁰g] における非語頭入り渡り鼻音 [⁰] の/N/[ŋ] への昇格（井上史雄1980、斎藤孝滋1987a、同2001、同2002c）で説明できる。従って、① [⁰g]/[⁰g] > ③ [g]/[⁰g] > ⑥ [g]/[ŋg] の推定が成り立つ。

⑦ [ŋ]/[ŋ] は、祖形① [⁰g]/[⁰g] における語頭及び非語頭入り渡り鼻音 [⁰] による [g] への順行同化で説明できる。また、一方で、② [⁰g]/[ŋ] における語頭入り渡り鼻音 [⁰] による [g] への順行同化でも説明できる。従って、以上を総合し、従って、① [⁰g]/[⁰g] (> ② [⁰g]/[ŋ]) > ⑦ [ŋ]/[ŋ] の推定が成り立つ。

⑧ [g]/[ŋ] は、祖形① [⁰g]/[⁰g] における語頭入り渡り鼻音 [⁰] 脱落と、非語頭入り渡り鼻音 [⁰] による [g] への順行同化で説明できる。また、一方で、④ [g]/[⁰g] における非語頭入り渡り鼻音 [⁰] による [g] への順行同化でも説明できる。従って、以上を総合し、① [⁰g]/[⁰g] (> ④ [g]/[⁰g]) > ⑧ [g]/[ŋ] の推定が成り立つ。

⑨ [g]/[ŋ] は、ガ行音については⑧と同様であるが、カ行音に語中子音有声化がみられ[k]/[g]となる点で異なる。なお、ガ行音が語頭では「+有声性」、語中では「+鼻音性」であるため、両者が統合することはない。

⑩ [g]/[ŋ] V_{W・M}、[t] V_{N#}、[N] V_{N#} は、非語頭において、直後に V_{W・M} (広母音・半広母音) が位置する場合は、⑧と同様であるが、特に語末#において直後に V_N (狭母音) が位置する場合、[N] V_{N#} のときは、⑤の場合と同様に、(i) 母音 V_N 脱落 ([^og] V_{N#} > [^og]#) + (ii) 語末子音 [^og] の [^o] による [g] への順行同化 ([^og]# > [ŋ]#) + (iii) 語末環境への同化による口蓋垂鼻音化 ([N]#) で説明できる。一方、[t] V_{N#} のときは、(i) 母音 V_N 脱落 ([^og] V_{N#} > [^og]#) + (iv) 入り渡り鼻音 [^o] の脱落 ([^og] > [g]) + (v) 語末環境への同化による破裂要素 [g] の無声内破音化 ([g] > [g̊_{or}[k]]) + (vi) 無標内破音 [t] 化 ([g̊_{or}[k]] > [t]) で説明できる。従って、「① [^og]/[^og] (>③ [g]/[^og]) >⑧ [g]/[ŋ]」と共に「① [^og]/[^og] V_{N#} >⑤ [g]/[^og]# > [g]/[ŋ]# > [g]/[N]#」、① [^og]/[^og] V_{N#} (>③ [g]/[^og] V_{N#}) > [g]/[^og]# > [g]/[g]# > [g]/[g̊_{or}[k]] >⑩ [g]/[t]」の推定が成り立つ。

⑪ [g]/[g] [v] は、祖形① [^og]/[^og] における語頭・非語頭の入り渡り鼻音 [^o] 脱落 ([^og]/[^og] > [g]/[g]) (+ 非語頭における摩擦音化 [g] > [v]) で説明できる。また、一方で、③ [g]/[^og] における非語頭入り渡り鼻音 [^o] 脱落 (+ 摩擦音化) でも説明できる。従って、「① [^og]/[^og] (>③ [g]/[^og]) >⑪ [g]/[g] > [g]/[v]」の推定が成り立つ。

⑫ [g]/[^og] V_{W・M}、[?] V_{N#} は、非語頭において、直後に V_{W・M} (広母音・半広母音) が位置する場合は、③と同様であるが、特に語末#において直後に V_N (狭母音) が位置する場合、[?] V_{N#} のときは、(i) 母音 V_N 脱落 ([^og] V_{N#} > [^og]#) + (iv) 入り渡り鼻音 [^o] の脱落 ([^og] > [g]) + (v) 語末環境への同化による破裂要素 [g] の無声内破音化 ([g] > [g̊_{or}[k]]) + (vii) 声門閉鎖音 [?] 化 ([g̊_{or}[k]] > [?]) で説明できる。従って、「① [^og]/[^og] V_{W・M} (>③ [g]/[^og] V_{W・M}) >⑫ [g]/[g] V_{W・M}」と① [^og]/[^og] V_{N#} (>③ [g]/[^og] V_{N#}) > [g]/[g]# > [g]/[g̊_{or}[k]]# >⑫ [g]/[?]#」の推定が成り立つ。

以上、②～⑫の成立は、祖形として① [^og]/[^og] を設定することで矛盾なく説明でき、成立過程を推定することができた。

従って、②～⑫の共通祖形として① [^og]/[^og] が推定されるのである。

次に、⑬ [k]/[k] について検討する。

⑬ [k]/[k] は、① [^og]/[^og] を祖形に設定した場合、語頭・非語頭入り渡

り鼻音 [ŋ] 脱落は説明できる ([⁰g]/[⁰g] > [g]/[g]) もの、(無声化母音でもなく語末#環境でもない) 母音間での無声子音化 ([g]/[g] > [k]/[k]) は説明が困難である。従って、**13** [k]/[k] の祖形は、**1**以外の、そして**1**~**12**までの祖形としても成り立つものである必要があることから、**1** [⁰g]/[⁰g] と**13** [k]/[k] の共通祖形ということになる。

ガ行の(清音 [k] に対する)濁音としての弁別的特徴は、入り渡り鼻音 [ŋ] であった(=破裂要素の有声性 [g] ではない)ことを考慮し、ここでは、共通祖形として**0***[⁰g~⁰k]/[⁰g~⁰k] (破裂要素は軟口蓋破裂音であればよい)を設定する^[注2]。

以下に、**0***[⁰g~⁰k]/[⁰g~⁰k] を祖形として設定した**1** [⁰g]/[⁰g] と**13** [k]/[k] の成立過程の推定を行う。

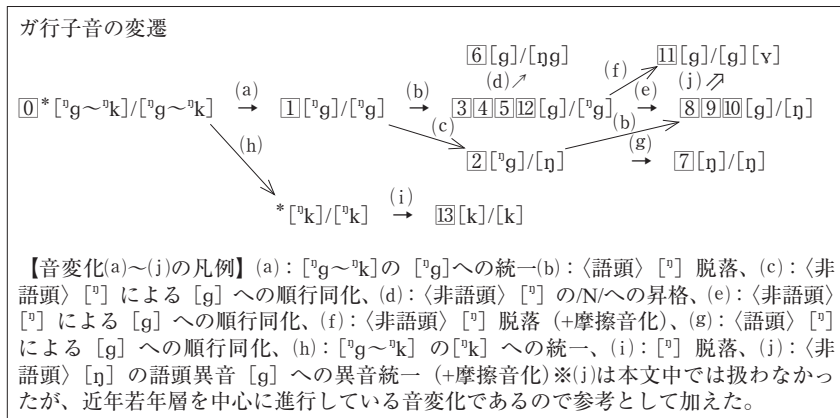
1 [⁰g]/[⁰g] は、祖形**0** [⁰g~⁰k]/[⁰g~⁰k] の語頭・非語頭における破裂要素の有声軟口蓋破裂音 [g] (異音レベルでは [g]) への統一で説明できる。従って、**0***[⁰g~⁰k]/[⁰g~⁰k] > **1** [⁰g]/[⁰g] の推定が成り立つ。

13 [k]/[k] は、祖形**0***[⁰g~⁰k]/[⁰g~⁰k] の語頭・非語頭における破裂要素の無声軟口蓋破裂音 [k] (異音レベルでは [k]) への統一と、入り渡り鼻音 [ŋ] 脱落 ([⁰k] > [k]) で説明できる。従って、**0***[⁰g~⁰k]/[⁰g~⁰k] > * [⁰k]/[⁰k] > **13** [k]/[k] の推定が成り立つ。

6. 結論

以上より、**1**~**13**の共通祖形は**0***[⁰g~⁰k]/[⁰g~⁰k] であると推定でき、各類型の成立過程(煩雑さを避け後続母音がV_{w.m}の場合)とそのメカニズムを示すと図3のようである。

図3：比較方言学的に推定される⑩～⑬の成立過程



6. おわりに

本稿では、従来、試みられなかった、日本全国の方言を対象とした比較方言学的考察により、新たな祖形を見出し、類型成立の総合的推定を行った。

今後は、ダ行・ザ行・バ行について同様の方法で研究を進め、総合した上で、〔文献〕に挙げた先行研究との詳細な検討を行いたい。

【注】1、2、柴田武（前掲論文）は具体的音価の推定はしていないが、古代中央語における語頭の鼻音を伴った濁音存在の可能性を指摘している。本稿における祖形類型⑩は、類型⑬が地理的位置から中央語との分岐が極めて古い時代であったと推定されることから、柴田（前掲書）の指摘の裏付けとなる可能性があるといえよう。

〔文献〕

- 有坂秀世（1957）『国語音韻史の研究増補新版』三省堂
 井上史雄（1980）「言語の構造の変遷」柴田武編『講座言語 第1巻 言語の構造』大修館
 上野善道ら（1989）「日本方言音韻総覧」『日本方言大辞典下巻』小学館
 大友信一（1962）「『四つ仮名』混同の音声事情」『国語学研究』2
 大友信一（1963）『室町時代の国語音声の研究』至文堂
 大橋純一（2002）『東北方言音声の研究』（おうふう）

- 加藤正信 (1975) 「方言の音声とアクセント」大石初太郎・上村幸雄編『方言と標準語—日本語方言概説—』筑摩書房
- 加藤正信・齋藤孝滋・半沢康・亀田裕見 (1994) 「福島県小高町における方言の共通語化に関する社会言語学的調査報告」『日本文化研究所研究報告』別館31
- 川上葵 (1990) 「昔の清音、濁音」『国語研究』53
- 木田章義 (1978) 「濁音史摘要」『論集日本文学・日本語1上代』角川書店
- 金田一春彦 (1953) 「音韻」東条操編『日本語方言学』吉川弘文堂
- 国立国語研究所 (1959) 『日本方言の記述的研究』明治書院
- 国立国語研究所 (1967) 『日本言語地図 (1)』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所 (1990) 『日本語の母音、子音、音節：調音運動の実験音声学的研究』秀英出版
- 小松英雄 (1981) 『日本語の世界7 日本語の音韻』中央公論社
- 斎藤孝滋 (1987a) 「『語中における子音の有声化現象』の音韻論的解釈—岩手方言を中心に—」『語文論叢』15
- 斎藤孝滋 (1987b) 「岩手方言における拍の統合現象—共通語の「ル」と「リ」、「ヌ」と「ニ」に対応する拍について—」『日本語研究』9 (井上史雄ら1994『日本列島方言叢書3 東北方言考② (岩手県・宮城県・福島県)』ゆまに書房に再録)
- 斎藤孝滋 (1990) 「岩手方言における語中子音有声化現象 音環境・語彙的事情・世代の観点から」『国語学研究』30
- 斎藤孝滋 (1991) 「岩手方言における語中子音鼻音化現象—音環境・語彙的事情・世代の観点から—」『語文論叢』19
- 斎藤孝滋 (1992a) 「岩手県一関市舞川方言の音韻」『東北大学日本文化研究所研究報告別巻』29
- 斎藤孝滋 (1992b) 「岩手方言における語中子音有声化・鼻音化現象 言語内的・外的要因の観点から」『国語学』168
- 斎藤孝滋 (1992c) 「母音無声化の『広さ』と『強さ』—岩手方言を中心に—」『国語学研究』31
- 斎藤孝滋 (1992d) 「特集：列島各地の日本語—方言録音資料紹介— —〈各地録音紹介—文字化と解説 東北(2)〉 岩手方言」『国文学 解釈と鑑賞』57-7
- 斎藤孝滋 (1993) 「岩手県三陸町綾里方言の音韻」『東北大学文学部日本語学科論集』3
- 斎藤孝滋 (2001) 「岩手県久慈市方言の音韻」『日本文化研究』中国大連外国語学院
- 斎藤孝滋 (2002a) 「音声研究の歴史」飛田良文・佐藤武義編『現代日本語講座第3巻 発音』明治書院
- 斎藤孝滋 (2002b) 「日本方言の音韻」北原保雄監修、江端義夫編『朝倉日本語講座10方言』朝倉書店
- 斎藤孝滋 (2002c) 「岩手県久慈市方言の音韻対応-共通語との対応を中心として」『玉藻』38
- 柴田武 (1988) 『方言論』平凡社
- 柴田武 (1989) 「語頭の濁音、その存在と発音」『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』桜楓社
- 高山倫明 (1992) 「清濁小考」『日本語論究』2
- 中田祝夫編 (1972) 『講座国語史2音韻史・文字史』大修館
- 橋本進吉 (1966) 『国語音韻史』(『橋本進吉博士著作集6』) 岩波書店

- 橋本進吉（1950）『国語音韻の研究』（橋本進吉博士著作集4）岩波書店
浜田敦（1970）『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店
浜田敦（1984）『日本語の史的的研究』臨川書店
早田輝洋（1977）「日本語の音韻とリズム」『伝統と現代』45
馬淵和夫（1971）『国語音韻論』笠間書院
平山輝男編（1982）『北奥方言基礎語彙の総合的研究』桜楓社
平山輝男ら編（1992～1994）『現代日本語方言大辞典1～6巻索引3巻』明治書院